

龍源寺報

◎編集発行◎
〒949-8311
新潟県中魚沼郡津南町中深見
深見山 龍源寺
☎(025)765-3055
http://www.shinkenzan.com

龍源寺 寺子屋塾開講



授業の様子

八月十八日～二十四日の一週間、昨年度より再開致しました寺子屋塾を今年も開講しました。今年からは対象を小学生にし、坐禅、英語、夏休みの宿題、自習という内容で行いました。龍源寺寺族の恵利は中学高校の英語教員免許をもち、児童館で働いた経験もありますのでその経験を活かして先生として参加してもらいました。

子供たちはみんな素直で、教えているこちら側も地域や国の未来を明るく感じさせてくれる存在でありました。

皆さまもご存じのように龍源寺では幕末の時代、赤山義塾という寺子屋塾を開講しておりました。

生徒の中からは現代の日本を形作った様々な人材を輩出しております。

龍源寺としてはこの寺子屋塾で心を磨いていってほしいと願っています。人間、何をなしていくにもこの心が出発点であります。夢をもち、実現させるのもすべては心から始まります。

毎年行っていきたいと思っておりますので来年度もお待ちしております。

おります。来年は子供たちの感性を磨く授業も考えております。よろしく願います。



最終日に記念撮影

寺子屋塾と坐禅

寺子屋塾では勉強を始める前に十五分～二十分くらいの坐禅を行います。子供たちは坐禅のようにじっとしていなければならぬ経験は案外しませんが新鮮に感じられるかもしれません。どうしてもモジモジ動いてしまうこともあります。その時に子供たちに伝えることは、「体が動いてしまうのは、心が動いてしまっているということなんだよ。心に波風がたつと体は動いてしまうよ」

ということですが、坐禅を通して子供たちには平常心を養ってもらいたいと私は考えます。受験でもスポーツでも武道でも人前で挨拶をしなきゃいけない時でもなんでも、自分の培ってきた、努力してきた実力を如何なく発揮するのに鍵にな

るのは心の状態にあります。本番に普段の心の状態と同じようにもっていくのは難しいことです。努力して努力して練習を本番のように、本番は練習のようにもっていくのも大切な状況においても自分らしく力をだすには、やはりその時その時に応じて心を平静に保つことで心技体を一致させていくことでしよう。技も体も磨けていても、心を磨くということとはなかなか難しいのではないのでしょうか。心が磨かれていないとせっかく結果を残しても、心に驕りが生じ、そこから生まれる綻びが不幸を生んでしまうこともあります。結果は過程にすぎません。過程が私たちを磨いていくのです。

坐禅を通じて心の在り方を子供たちに伝えていければと思っております。

龍源寺のシロ

龍源寺でかわいがっていたネコのシロが亡くなってしまいました。11月4日の夕方からお寺に帰ってこなくなり、翌日の午後2時過ぎ頃に近所の田んぼの中で倒れているところを見つけました。ずいぶん苦しんだ様子で、外傷はなかったので何かしらの毒で命を落としてしまったようです。いろいろ調べてみますとネズミの毒くらいではネコは大丈夫なようなのですが、農薬で強いものはよくないとのことでした。田んぼの中でしたので、きっと農薬をまかれた草を食べたのでしょう。正直、くやしい気持ちはありますがネコが薬の毒性に気づくことができなかったのでしょうかがなかったのでしょうか。まだ四歳で遊び盛りのネコでした。あと10年以上は一緒に過ごすつもりでしたので無念でなりません。兄妹のリンにもシロの亡骸をしっかり確



シロ

認させ、シロにむかって小さい声で鳴いていたのでシロの死を理解した様子でした。

発見した日の夕方五時に、シートにくるみ、御血脈を両手にはさんでもたせ、龍源寺のペットのお墓におさめ、住職・副住職で御経を読み、みんなからご焼香をしてもらいました。発見も早かったのできれいな状態で送り出すことができました。御経の最後に読んだ普回向、
「願わくはこの功德をもって普く一切に及ぼし、我らと衆生と皆共に仏道を成ぜんことを」とお唱えした時、シロの尊い命を無駄にしないで、自分たちの道を成すことに生きていかなければならないと強く心に思いました。

雪が降るまではロウソクと線香をあげている毎日です。人も動物も植物も皆すべて、同等の命であるのだと改めて感じました。



リンとぬくぬく

平成二十五年 年回表

一周忌……平成二十四年
三回忌……平成二十三年
七回忌……平成十九年

十三回忌……平成十三年
十七回忌……平成九年
二十五回忌……平成元年
三十三回忌……昭和五十六年

立春大吉 鎮防火燭札について

龍源寺のお正月は檀家さんたちで賑わいます。お寺への年始にみなさんお越しいただき、元旦午前は村の方々、二日午前はそれ以外の集落に方々がお参りにきて、龍源寺からお札をもらっていきます。このお札が立春大吉・鎮防火燭の二枚のお札であります。みなさん玄関に貼ってくれているものと思います。

この二枚の札の意味と由来について説明したいと思います。この札は曹洞宗独特のものと言われ、昔の雲水はこの札を目印に諸国を行脚したそうであります。立春大吉は道元禪師の十五大吉という文に由来があります。文章中に十五の大吉という言葉がでてくるこの文は道元禪師四十八歳、寛元五年の立春に宗門の繁昌、永平寺の発展、優れた弟子が門下にたくさん集ってくるようにとの祈願文として書かれました。中国の寺院では立春に願をかけてその願文札を貼るという習慣があったそうなので道元禪師はこの風習

曹洞宗において 読誦される御経

その3

摩訶般若波羅蜜多心經

御経のなかでも一番有名でみなさんになじみのあるものといえるのではないのでしょうか。本屋さんによくと般若心経に関する書籍は山のようであり、今更わたくしが紹介するまでもなく、みなさん自分なりに意味を調べている人が多い御経でもあると思います。

般若心経は膨大な般若教典群の教えの核心である「空」による「智慧の完成」を簡潔に解き明かし、末尾（ギヤーテーギヤーテー…）に彼岸への到達を称える真言を付した短い御経です。サンスクリット語の原典二種、チベット語訳並びに漢訳七種などいくつかありますが、私たちがよく耳にし、読むものは西遊記で有名な玄奘三蔵法師の訳であります。玄奘訳の小本系にたいして大本系というものには正宗分（本文）の前後に序文と流通分があるなど二口に般若心経と申しましてもいろいろあります。序文ではお釈迦さま、観音さま（観自在菩薩）が登場

になつたもののようです。立春こそが冬が終わって今日から新春という季節の変わり目であり、暦では立春を起点として二十四節気や八十八夜を算出します。旧暦時代には正月と立春が前後することがあり、そんなことから正月に立春大吉札を配り、一家大吉を祈年したのででしょうか。宗門における立春大吉は道元禪師に始まり、瑩山禪師が諸堂に貼ることを実行されたという曹洞宗にとつては大事な風習といえるでしょう。

一方、鎮防火燭は火伏の札であります。この札は本来二十四節気の清明の日に貼られたようです。修行道場ではその昔、清明の日が諸堂の火種を交換する日でありました。昔は火を簡単につけることはできず、火種を各寮大切に保っていたそうです。そしてこの清明の頃は空気が乾燥して火災の起こりやすい季節でもあるのです。現在でもそうでありますが、お寺にとつて一番の大敵はなんといっても火であります。火災は伽藍の全てを灰燼に帰します。檀家さん方の手で維持されている伽藍が火災にあうことは許されないことでもあります。浄財喜捨の固まりが伽藍であります。

瑩山禪師は積極的に優秀な弟子を育成し、全国にたくさん曹洞宗寺院を建立するきっかけをつくりました。曹洞宗の伽藍も爆発的に増えていきます。その伽藍を守るために火伏の行持を非常に重んじたそうでもあります。

曹洞宗両祖由来のこの二枚の札は本来、立春と清明の頃に檀家さんに差し上げるのが本義でありましたが、龍源寺では新春の元旦と二日の年始にきてくださった方々に差し上げています。二年の始まりに菩提寺の本尊さまに新年の挨拶、そして自らの祈りと誓いを捧げ、一家大吉と住宅火伏の札をもらい、新たに玄関に貼って二年のスタートとするこの風習はずっと大事に行っていたい行持であります。今までお正月に菩提寺にお参りに来ていなかった方々も是非お寺にきてこの札をもらい、自宅の玄関に貼って心機転じていただきたいと思います。



庫裡の玄関

人物としてでてきます。観音さまは空を体得するという智慧の完成に至っていますが、そこでお釈迦さまの弟子である舍利弗が観音さまに質問をし、ここから本文に入っていきます。本文はお釈迦さまの見守る中、観音さまが舍利弗に空とは何か、智慧が完成するとはどういうことかと説きます。流通分では再びお釈迦さまが会話に入り、観音さまを労い、舍利弗は大いなる喜びに満ちあふれた様子で般若心経はしめくくられていきます。



さて、般若心経を理解するには「空」とは何か？ということが理解できるかどうかにあります。空とは二言でいうと「関係性の中にある現象に固定した実体などない」といったところでしょうか。ちょっと難しいですが説明してみると、すべての存在するものは様々な関係があつて成り立っている、それは永遠なるものではなく流動的で常に変化していくものである、故に明確なる我などないし、「瞬」瞬に存在している二つの現象にすぎない

言の葉散策

第六回

本来無一物

私たちには本来、体・心ともに執着すべきものは何もないのではないのでしょうか。私たちは生まれたときには何にも持たずまっさらで生まれてきます。死ぬときも何にももてないで死んでいきます。これをもつていきたい、あれをもつていきたいというようなものは生まれる時も死ぬ時ありません。もつてい

ませんからね。

仏教ではあらゆるものの真実は空であると説きます。私たちは様々な関係性の中にある現象にすぎないのです。固定した確固とした存在はなく、常に転変していくのがすべてのものの本来の姿であるのに、人間は自らの執着・迷妄により、それが苦しみのもとであることをお釈迦さまは見抜きました。

この本来無一物という言葉は中国唐代の禅僧・慧能禪師に由来するものです。同門の神秀が「身はこれ菩提樹、心は明鏡の台の如し、時々勤めて拭拭し、塵垢あらしむることなかれ」と述べたのに対し、慧能は「菩提もと樹なく、明鏡また台にあらず、本来無一物、いずこにか塵垢あらん」と、身心ともに本来清浄であるなら煩悩は何処から来るのかということこのように述べました。

無物の自覚に生きる、これこそが心の自由、精神の自由につながるのではないのでしょうか。社会・環境・人間関係のしがらみ、あるいは自らの

今までの人生という過去からのしがらみ、もともとは何にもないのに経験・お金・物質・地位・権力・学歴など、一生懸命になつて手に入れたからこそ執着が起き人は苦しみます。

一生懸命生きることばらしいことです。しかし、その過程で手に入れたものにこだわると苦しみのもとになります。私たちは本来無一物。そんな気持ちでいられたら少しは心が楽になり、自由でいられるのではないでしょ

